

氏 名：安 島 幹 子

学 位 の 種 類：博士（看護学）

報 告 番 号：甲第121号

学 位 記 番 号：博第117号

学位授与年月日：令和6年3月13日

学位授与の要件：学位規則第4条第1項該当

論 文 題 目：実習を通して、看護学生が患者にとっての病いを理解する経験

Experiences of Nursing Students to Understand Illnesses for Patients Through Clinical Practicum

論 文 審 査 員：主査 佐々木 幾 美

副査 吉 田 みつ子（正研究指導教員）

副査 江 本 リ ナ（副研究指導教員）

副査 鷹 野 朋 実

副査 守 田 美奈子

論文審査の結果の要旨

審査の概要

本研究の目的は、実習を通して、学生が患者にとっての病いを理解する経験を明らかにすることであり、その着眼は、病いをもつ当事者である患者にとっての感じ方や考え方について、患者の置かれた状況や、患者の意味づけを理解することである。看護学生（以下、学生）は臨地実習という短期間の中で、どのように患者にとっての病いに接近し、理解しているのか、その経験を明らかにするものである。疾患が生活にもたらす意味は一人ひとり異なり（Cassell, 1976/1991 : Kleinman, 1988/1996 : Toombs, 2001/1992）、看護を行う上では、その人が疾患をどのように捉えているのか、という個別固有の病いの意味を理解することが重要であることから、学生が実習を通してその意味を理解する経験を明らかにすることは学生への教育を考える上で重要であると評価された。

文献検討では、患者自身の病いの体験に着目した研究が散見されるが、患者の語りを踏まえたケアの実践については研究が少なく、加えて看護基礎教育で求められる対象理解の学修に対する様々な課題についても明らかにされており、本研究のオリジナリティが明確に示されていた。

研究デザインは質的記述的研究デザインであり、データ分析は、Flic（2007/2011）のテーマ的コード化を参考として、事例ごとに小テーマ、中テーマを抽出し、中テーマの共通性から大テーマを抽出している。目的に合わせた研究方法が選択され、分析の手続きが明示されていた。

結果は、7名の研究参加者が語った全15事例から分析された4つの大テーマが明らかになった。研究参加者の生き生きとした語りのデータを引用しながら、学生が患者にとっての病いを理解する経験が詳細に示されており、本研究の特徴でもあると評価された。

考察では、研究結果を用いて、研究目的や研究意義から一貫した内容で論述されていた。学生が困惑した局面や生じる様々な感情こそ患者にとっての病いに近づく機会になりうると教員は認識し、学生の主体的な振り返りを支援することが重要であること、教員や実習指導者が患者との関わりを学生に間近で見せ、共にケアし、患者への見解や看護を語り合うことで、患者の反応に着目する手がかりや、患者にとっての病いに接近する素地を学生が感じられことなど、教育実践への示唆についても明確に述べられていると評価された。

審査の結果、本論文は本学の審査基準を満たしていると判断し、博士（看護学）の学位論文として「合格」と判定した。